

「秋色の児童机(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka



本校がある大学構内は、武蔵野台地の東端の段丘崖上のぎりぎりの位置にある。明治の地形図を見ると、陸軍の施設があったことがわかる。まだ建物が少なく、等高線がわかりやすい。現在の地形図よりも、地形の読み取りがずっとしやすい。周囲には「桑畑」の記号が多く、養蚕が盛んだったこともわかる。大学構内には現在でもクワの木が見られる。クワは生命力が非常に強い。もしかしたら、明治の生き残りかも知れない。



子どもたちと自然観察に出かけるのは、大学の西門の近くの台地上が多い。ここには、カキやクリの木が何本か残っている。特にこのカキは、実の重みで枝垂れて、子どもでも楽に「収穫」できる。



このカキはもちろん「渋柿」で、そのままでは食べられない。しかし、多くの子どもは、何個か持ち帰っていた。何に使うのか聞くと「観察したあと、飾る」という模範的な解答だった。



栗も落ちていて、すでに時期が遅く、ほとんど虫にやられている。クリシギゾウムシの幼虫や、その穴に入りこんだハサミムシが多い。あとは丸い実に押されてつぶれたようになった「三日月栗」だけだ。こんなものでも、子どもたちにとっては「収穫」なのだ。

